

# 「神戸っ子」のレジリエンス

— たゆたえども沈まず

小島一哉  
Kojima Kazuya



神戸は、山と海に囲まれた風光明媚な街である。一方、川の源流から河口まで数キロメートルという場所も多く、過去には数々の水害が起こった。また、阪神・淡路大震災という巨大災害も経験している。幾度の試験を乗り越えてきた「神戸っ子」のレジリエンスを、少しでも紹介したいと思い筆をとった。

「こじま・かずや」  
大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1982年、大阪ガス(株)入社。2017年より現職。専門は「地域社会の防災減災」。あわせて、ナショナル・レジリエンス・コミュニティ(レジリエ学)関西各校世話人、人と防災未来センター特別研究調査員、大阪公立大学都市科学・防災研究センター特別研究員などを兼職している。

## 『細雪』と阪神大水害

文豪、谷崎潤一郎は、昭和初期に兵庫県武庫郡住吉村(現・神戸市東灘区)に住まい、大作『細雪』を執筆した。当時の自宅は、倚松庵として、六甲ライナーの建設により移設されたものの、阪神電車魚崎駅の北側に残っている。その物語の中で、谷崎は水害に

遭遇した模様を詳細にわたって描写している。「五日の明け方からは俄に沛然たる豪雨となつて(中略)阪神間にあの記録的な悲惨事を齎した大水害を起そうとは誰にも考え及ばなかつた」と始まり、大水害と四姉妹はじめ時岡家の様子を実際の地名や橋の名前、鉄道などの名前を使って克明に記している。「阪急線路の北側の橋のところに押し流されて来た家や、土砂や、岩石や、樹木が、後から後

してくれましたので、万が一の時にはお隣さんの避難所にとどり着ける。

## 六甲山系を愛する神戸っ子

ハード面だけではなく、住民同士の助け合い(共助)の取り組みも進められている。小説『細雪』で四女の妙子を探しにきた義兄・貞之助が避難した「甲南女学校」は現在移転して「甲南女子大学」になっている。そこは住民の避難所として現在も活用されている。

六甲山系はふもとの住民に数々の災いをもたらした。しかし、神戸っ子は六甲山系を裏山のように愛し、くらしのなかに六甲山系が溶け込んでいる。住宅地を抜けるハイキングやピクニックのルートがたくさんある。川には親水公園が多くつくられ、犬たちの散歩コースにもなり、また、水辺で遊ぶ親子連れも多く見かける。



1936年から1943年まで、谷崎潤一郎が居住した倚松庵



氾濫した住吉川と阪神国道

からと山のように積み重なってしまった」「住吉川の氾濫の状況がやや伝わって来て、国道の田中から以西は全部大河のようになって濁流が渦巻いていること、従って野寄、横屋、青木等が最も悲惨であるらしいこと、国道以南は甲南市場も、ゴルフ場もなくなつて、直ちに海につながっていること、人畜の死傷、家屋の倒潰(たふし)流失が夥しいらしいこと、等々が(中略)分つて来た」など被害の様相が手に取るようにわかる。高台の洋裁学院でお茶を飲んでいた、四女の妙子(こいさん)が洋裁学院の家族とともに濁流に巻き込まれて、流されそうになった。その瞬間に写真師に助けられた。その写真師は「阪神間には大体六七十年目毎に山津浪の起る記録があり、今年がその年に当たっていると云うことを(中略)聞き込んでいた」とある。

## 人気の住宅地と防災・減災

この水害は、のちに阪神大水害と命名された昭和13(1938)年の大水害である。約700人の犠

六甲の山頂付近には、市民の憩いの施設も点在している。山の上からの夜景は、「1000万ドルの夜景」ともいわれ神戸っ子にはもちろん、全国や世界の人々からも愛されている。

昭和24年に発表された昭和の名曲『青い山脈』にこんなエピソードが残されている。作曲家服部良一は自身の著書にこう記している。「梅田から省線に乗って京都へ向かう途中のこと、日本晴れのはるか彼方に、くつきりと稜線を描く六甲山脈の連峰を車窓越しにながめているうちに、にわかに曲想がわいてきた」(日本文芸社『ぼくの音楽人生』1993年)。歌われている山脈は六甲山系ではないというが、メロディは六甲山が源流になっているようだ。

## レジリエンスを高める — たゆたえども沈まず

神戸っ子は、平成30年に7月豪雨(西日本豪雨)にも見舞われた。兵庫県にも「特別警報」が発令された。雨量は昭和13年の豪雨に匹敵する。神戸市内では1000件以

死者が出ている。明治以降、神戸市の人口は急増し、六甲山系の木々は家屋や薪用として伐採され、はげ山の様相を呈していた。

もともと、六甲山系は花崗岩質で、30〜50年をかけて風化や浸食により、土石流を起こしやすい真砂土に細粒化される。現代のように砂防ダムが一切なかった時代なので、無数の谷筋を伝わって、住吉川などの海につながる川を経て市街地まで一気に直接流れ込んでいった。はげ山を計画的に植林していくグリーンベルト事業や土石流を防ぐ砂防ダムの建設など土砂災害対策が計画的に進められている。がけ崩れの防止のためにコンクリートやフェンスで囲って、街を守っている。阪神大水害当時、まったくなかった砂防ダムが現在では600基程度になっていると聞く。南斜面で見晴らしの良い六甲山系は、いまでも人気の住宅地だ。そのため、宅地開発は山の上の方まで進んでいる。土砂災害警戒区域ぎりぎりのところまで住宅が建設されている。

上の土砂崩れが報告された。人災を免れたものの、家屋が損壊し避難所生活を余儀なくされた人も多く、道路への土砂崩れで通行止めになり大きく迂回しないといけない、そんな不向きも経験している。平成7(1995)年1月の阪神・淡路大震災では、6000人を超える犠牲者を出している。

Fluctuat nec mergitur (ラテン語で『たゆたえども沈まず』)。パリの市紋章に刻まれた言葉である。パリ市は過去に幾度もセーヌ川の氾濫といった自然災害や、革命や戦争などの悲劇に見舞われてきた。荒波にもまれながらも決してパリ市は沈まない。パリ市民の気品とプライドを感じる。幾度もの試験を乗り越えてきたパリジャン、パリジェンヌのレジリエンスだと思ふ。神戸っ子も阪神大水害、第二次世界大戦での空襲、阪神・淡路大震災など幾度も試験を乗り越えてきた。自然と共生しながら見事に復旧・復興し復活している。神戸っ子のレジリエンスを高める取り組みにも終わりはしない。

引用／谷崎潤一郎『細雪(中)』新潮文庫、1995